

外国語カリキュラムの分析評価と今後の展望

— 大学共通科目外国語履修者の意識調査 —

佐藤修子 中屋 晃
早坂慶子 高島淑郎
棚瀬江里哉 J. E. アリソン
T. H. ゲ ッ ツ

目次

1. 調査の背景
2. 調査目的
3. 調査方法
4. 結果と考察

1. 調査の背景

1991年の「大学設置基準の大綱化」に伴い、大学が自主的に取得単位を決められるようになり(除総卒業単位)、外国語科目に関しては、英語および初習外国語履修の選択化が増え、単位が減少するという現象が現れた。おりしも1994年、田中慎也は『どこへ行く?大学の外国語教育』(三修社)で将来の外国語教育への不安を覗かせている。この改革は、実質的な「大学の英語教育・外国語教育の弱体化」(小池生夫2002)との評価もある。「大綱化」以後10余年で日本の大学外国語教育はどうなったのであろうか。

このような、規制緩和による外国語取得単位の減少と外国語科目の多様化は、学生のニーズに応えたものであるのか。小学校から英語教育が始められるようになった昨今、大学英語カリキュラムをどう変えなければならないのか。アジア言語の隆盛に対し、ヨーロッパ言語(独・仏語等)の将来はどうなっているのか。言語教育に従事するものにとっては不安材料が山積している。外国語教育の将来構想を練るに当たり、現状に対する何らかの客観的分析・評価が望まれる。

北星学園大学(文系私立四年制大学、学生数約3500名)では、言語教育センターを中心に外国語教育の内容充実を目指して、1996年以降、英語専攻の英文学科を除き、大学共通科目英語履修8単位を4単位とし、いわゆる第2(初習)外国語4単位の選択必修を無くし、4単位の必修英語(1年次配当)と8単位の選択必修の外国語(英語を含み、1・2年次配当)とした。英文学科は、英語以外の第2(初習)外国語から8単位が選択必修である。履修可能な言語は、2002年に韓国語を加えて、現在、英・独・仏・中・韓の5言語である。

図-1は、2002~05年の選択履修第1希望の推移で、4年間の平均で、英語4割(41.0%)、中・韓語4割(39.7%)、独・仏語2割(19.3%)となっていて、中国の経済的プレゼンスの増大や、メディアの影響による韓流ブームを背景に、中・韓のアジア言語履修希望者は増加し、英語希望

者に匹敵する水準に達している。

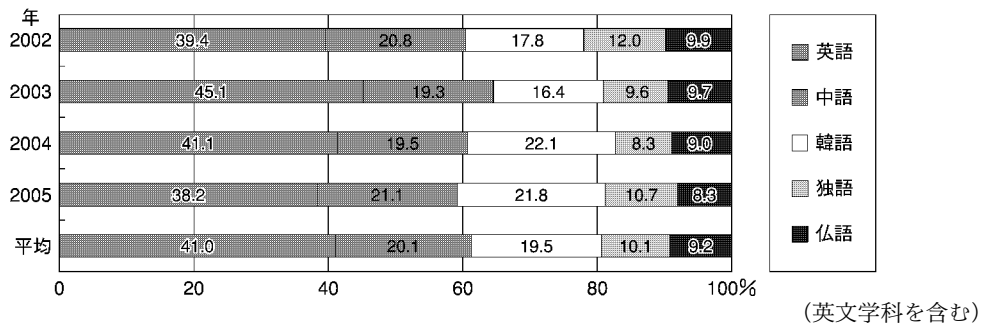


図-1 履修第1希望の推移 (2002～05年)

他方、「グローバル化」が謳われ、英語は「世界の共通語である」としてその必要性が声高に叫ばれている中で、選択英語履修可能な7学科の英語選択順位を見ると、第1希望を英語とする「英語だけ学びたい」学生が2005年入学生の44%いるものの、第1～3希望まで一貫して「英語を選択しない」学生も27%いる（図-2）。

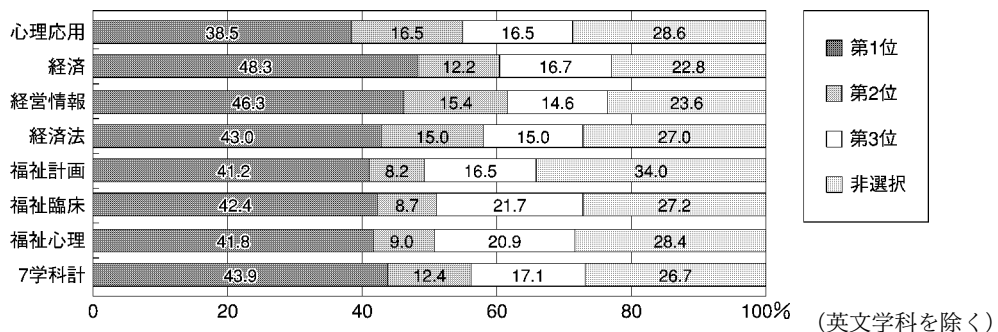


図-2 学科別英語選択順位 (2005年)

2. 調査目的

以上のような学内外の環境変化と、本学のこれまでのカリキュラムを分析評価し、これからの外国語教育の在り方を具体的に考えるために、「大学共通科目外国語履修者の意識調査」（対象約800名の悉皆調査で、回答者774名）を実施した。

調査目的は、本学の外国語教育に係る以下の事柄を明らかにすることである。

(1) カリキュラムに関して

- 1 共通科目として外国語を必修にするのは妥当か。選択でよいのか。
- 2 グローバル化の時代に、非英語専攻学生は英語をどうとらえているのか。
- 3 1, 2年次に必修を課すのは妥当か。
- 4 卒業後のニーズを考えると、4年間での履修を可能にすべきなのか。

(2) ニーズに関して

- 1 何語を希望するのか。その根拠・動機は何か。
- 2 履修言語の最終到達目標は。
- 3 履修言語・学科によるニーズ（将来の必要性・動機・目標）の違いや特徴は。

(3) 評価に関して

- 1 2年間の履修を経て、言語能力は増進したか。
- 2 2年間の授業の満足度は。
- 3 授業内容（シラバス・教材・教師）に対する学生の評価はどうか。
- 4 言語能力の増進や授業の満足度は、学生のスタンス・ニーズ・授業内容等とどのように関係しているのか（ないのか）。

3. 調査方法

3.1 調査方法・対象

調査は、過去2年間に履修した英語（文学部英文学科を除く7学科対象）と外国語（独語・仏語・中国語・韓国語＝英文学科を含む8学科対象）の全履修者を対象に、共通科目外国語履修最終学期に当たる2年目後期終了前の授業時間に実施した。回答数は、英語309名、独語79名、仏語81名、中国語182名、韓国語123名、計774名である。

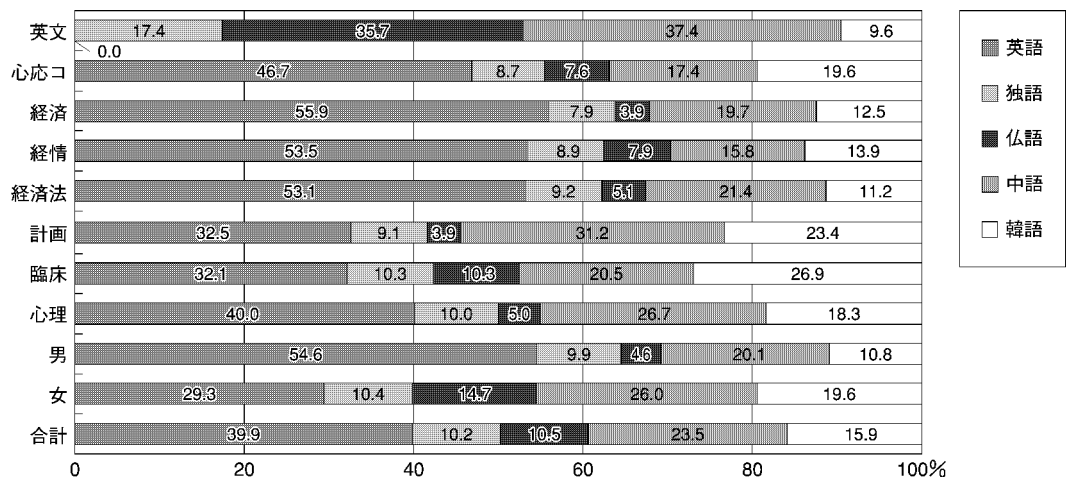


図-3 回答者の履修言語別属性（学科・性別）

調査方法は、さまざまな角度（属性および10の設問群）から全62項目の設問によるアンケート調査で学生の意識を問うもので、選択動機、ニーズ、授業・教材の評価、能力向上、満足度等の核となる設問群については、数量的な分析を行うため、4～5段階のスケール評価による回答とし、マーク・シート（カード）方式で回答を得た。

3.2 調査内容・項目

調査目的から、学生のⅠ．授業ニーズ把握とⅡ．授業評価を調査の基軸とし、生涯学習時代に

あって大学の語学教育が一つの機会に過ぎないことを踏まえて、学生の以前・現在・将来のⅢ、対語学スタンスを第3の軸とした。調査項目は以下のとおりである（調査票は付録参照）。

I. 授業ニーズ把握

- ・選択動機 6 設問：問 13～18（以下C. 選択動機）
- ・選択方法 4 設問：問 19～22（D. 選択方法）
- ・到達目標 10 設問：問 23～32（E. 到達目標）

II. 授業評価

- ・言語能力 8 設問：問 33～40（F. 言語能力）
- ・満足評価 7 設問：問 41～47（G. 満足度）
- ・授業内容 5 設問：問 48～52（H. 教材・教授法）

III. 対語学スタンス

- ・得意・好き 4 設問：問 6～9（A. 得意・好き）
- ・自分の将来の必要性 3 設問：問 10～12（B. 将来の必要性）
- ・大学語学教育の必要性 3 設問：問 53～55（I. 大学での必要性）
- ・今後の学習意向 5 設問：問 56～60（J. 今後の意向）
- ・回答者の属性 6 項目：1 学科・2 性別・3 履修言語・4 選択希望順位・5 入試方法・高校履修言語：問 61～62

3.3 集計・解析手法

集計・解析作業は、全体及び5言語別に行った。

主要設問の回答をスケール評価としたので、「頻度」に加えて、「平均値・標準偏差」、「相関係数・棄却確率」等の統計量が得られる。そこで、まず、以下の作業を行った。

- 0 各設問の単純集計（頻度）
- 1 各設問の平均値・標準偏差
- 2 各設問の性別・学科別等属性別の検定（相関行列使用）
- 3 全設問間の相関係数と棄却確率（危険率）

また、相関係数が計算できるとき、互いに相関のある多変量のデータ解析手法として「主成分分析」が有用であるので、大から小へと変量サイズを変えて、以下の主成分分析を行った。

- 4 主要全設問の主成分分析（設問群A. ～J. から54変量）
- 5 ニーズ設問の主成分分析（設問群B. C. E. から19変量）
- 6 評価設問の主成分分析（設問群F. G. H. I. から23変量）
- 7 各設問群別（A. 好き, C. 動機, E. 目標, F. 能力, G. 満足, H. 教育）の主成分分析

さらに、「調査目的(3)評価4」の「能力変化」や「満足度」と「スタンス・動機・目標・授業」等との関係を総合的に諸要因の「寄与度」で数量的に評価し比較するために、以下の2つのモデルによる重回帰分析を行った。

- 8 能力変化をA. 好き・C. 動機・E. 目標・H. 授業・G. 満足度で説明する「能力モデル」
- 9 満足度をA. 好き・C. 動機・E. 目標・H. 授業・F. 能力変化で説明する「満足モデル」

ただ、30 余もの変数による大規模な重回帰モデルを、1 クラス 30 人程度の調査対象からなる調査対象に適用するのは望ましくないので、「7 各設問群別の主成分分析」結果から、設問群毎に意味のある主成分（固有値 1 以上で、データ要約効率の大きいもの）得点を説明変数とする、要因別要約統計量による重回帰分析である。

4. 結果と考察

4.1 カリキュラムについて

4.1.1 英語の必要性

(1) 将来のあなたにとって英語は必要ですか。

将来の英語の必要性を「1. 不要－2. やや不要－3. 中立－4. やや必要－5. 必要」の 5 段階評価で問うている。

語学専攻の英文学科と非専攻のその他 7 学科を比較すると、「5. 必要」「4. やや必要」を合わせて「英語を必要」とするものは、英文学科で 81.9%，その他 7 学科で 53.6%であるのに対し、「3. 中立」は英文学科で 15.5%，その他で 32.1%，「1. 不要」「2. やや不要」を合わせて「英語を不要」とするものは、英文学科で 2.6%，その他で 14.3%，である。全体の平均値も 3.69 で、グローバル社会の中で、将来の英語の必要性を認めている者は、過半数を占めている。

履修言語間及び英語専攻・非専攻間（属性間）で平均値（あるいは相関係数）の大小を見てみると（表－1 a），属性別の平均値は全て 3 以上であり、平均的に言って、履修言語、英語専攻・非専攻に関わり無く、「将来、英語は必要」である。履修言語別に、平均値は仏・中・独・英・韓語の順、相関係数は仏・中・独・韓・英語の順で、平均値と相関係数の順位の違いは、標準偏差（回答者のばらつき）の大きさによる。相関係数を用いた検定では、独語以外は、平均値に概ね有意な差がある。

また、英語専攻と英語非専攻の学生間の「将来の英語の必要性」は平均値で 0.85 の差があり、相関係数を用いた検定では、その差は有意である。英語選択履修者の将来の英語の必要性は、相対的にさほど大きいとは言えない。

表－1 a 将来の英語の必要性（平均値・相関係数による大小比較と検定）

	全 体	英語専攻	英非専攻	英語履修	独語履修	仏語履修	中語履修	韓語履修
平 均 値	3.689	4.414	3.561	3.563	3.810	4.000	3.841	3.496
標準偏差	1.109	0.872	1.097	1.061	1.148	1.077	1.049	1.219
相関係数		0.275	－0.275	－0.092	0.037	0.096	0.076	－0.076
棄却確率	(検定)	0.0001	0.0001	0.0102	0.3048	0.0075	0.0345	0.0357

(2) 大学教育に英語は必要ですか。

大学教育における英語の必要性を「1. 不要－2. やや不要－3. 中立－4. やや必要－5. 必要」の 5 段階評価で問うている。

「5. 必要」「4. やや必要」を合わせて「英語を必要」とするものは、英文学科で 89.7%，英語非専攻のその他 7 学科で 70.2%であるのに対し、「3. 中立」は英文学科で 9.5%，その他で 15.0%，「1. 不要」「2. やや不要」を合わせて「英語を不要」とするものは、英文学科で 0.9%，

その他で14.7%,である。大学教育の中での英語の必要性を認めている者は7割を超えていて,「5. 必要」も全体で47.8%,英語非専攻で43.3%あり,全体の平均値も4.03と高い。

履修言語別の平均値(相関係数)は仏・独・中・英・韓語の順で,韓語以外は平均値が4点以上である(表-1b)。相関係数を用いた検定では,仏・韓語に有意な差がある。

また,英語専攻と英語非専攻の学生間の「大学教育での英語の必要性」は平均値で0.69の差があり,相関係数を用いた検定では,その差は有意である。

表-1b 大学教育での英語の必要性(平均値・相関係数による大小比較と検定)

	全 体	英語専攻	英非専攻	英語履修	独語履修	仏語履修	中語履修	韓語履修
平 均 値	4.030	4.612	3.927	4.019	4.139	4.494	4.055	3.642
標準偏差	1.179	0.728	1.213	1.207	1.144	0.772	1.128	1.295
相関係数		0.207	-0.207	-0.007	0.031	0.135	0.012	-0.143
棄却確率	(検定)	0.0001	0.0001	0.8432	0.3843	0.0002	0.7418	0.0001

4.1.2 ヨーロッパ言語の必要性

(1) 将来のあなたにとってヨーロッパ言語(独・仏語等)は必要ですか。

「5. 必要」「4. やや必要」を合わせて「ヨーロッパ言語を必要」とするものは,英文学科で38.8%,英語非専攻のその他7学科で14.1%であるのに対し,「3. 中立」は英文学科で36.2%,その他で31.2%,「1. 不要」「2. やや不要」を合わせて「ヨーロッパ言語を不要」とするものは,英文学科で25.0%,その他で54.7%,である。全体の平均値は2.42であり,将来不要とするものが多い。

履修言語別に平均値(あるいは相関係数)の大小を比較すると,仏・独・中・英・韓語の順で,平均値が3以上は仏語だけである。相関係数を用いた検定では,中国語以外は,平均値に有意な差がある。

また,英語専攻と英語非専攻の学生間の「将来のヨーロッパ言語の必要性」は平均値で0.84の差があり,相関係数を用いた検定では,その差は有意である。自分の将来にヨーロッパ言語の必要性を認めている者は,英文学科を主に一定の数がある。

表-2a 将来のヨーロッパ言語の必要性(平均値・相関係数による大小比較と検定)

	全 体	英語専攻	英非専攻	英語履修	独語履修	仏語履修	中語履修	韓語履修
平 均 値	2.422	3.138	2.296	2.278	2.835	3.259	2.462	1.911
標準偏差	1.174	1.090	1.143	1.129	1.119	1.086	1.146	1.028
相関係数		0.256	-0.256	-0.100	0.119	0.244	0.018	-0.190
棄却確率	(検定)	0.0001	0.0001	0.0053	0.0009	0.0001	0.6084	0.0001

(2) 大学教育にヨーロッパ言語(独・仏語等)は必要ですか。

「5. 必要」「4. やや必要」を合わせてヨーロッパ言語を必要とするものは,英文学科で59.4%,英語非専攻のその他7学科で43.0%であるのに対し,「3. 中立」は英文学科で31.0%,その他で34.3%,「1. 不要」「2. やや不要」を合わせてヨーロッパ言語を不要とするものは,英文学科で9.5%,その他で23.1%,である。全体の平均値は3.35であり,大学教育での必要性は相対

多数である。

履修言語別に平均値（あるいは相関係数）の大小を比較すると、仏・独・英・中・韓語の順で、平均値が3以下は韓語だけである。相関係数を用いた検定では、仏・韓語の平均値に有意な差がある。

また、英語専攻と英語非専攻の学生間の「大学教育でのヨーロッパ言語の必要性」は平均値で0.56の差があり、相関係数を用いた検定では、その差は有意である。大学教育にヨーロッパ言語の必要性を認めている者は、英文学科を主に一定の数がいる。

表-2b 大学教育でのヨーロッパ言語の必要性（平均値・相関係数による大小比較と検定）

	全 体	英語専攻	英非専攻	英語履修	独語履修	仏語履修	中語履修	韓語履修
平 均 値	3.354	3.828	3.271	3.375	3.430	3.988	3.291	2.927
標準偏差	1.185	1.069	1.185	1.178	1.198	1.036	1.157	1.135
相関係数		0.168	-0.168	0.015	0.022	0.183	-0.029	-0.157
棄却確率	(検定)	0.0001	0.0001	0.6826	0.5461	0.0001	0.4144	0.0001

4.1.3 アジア言語の必要性

(1) 将来のあなたにとってアジア言語（中・韓語等）は必要ですか。

「5. 必要」「4. やや必要」を合わせてアジア言語を必要とするものは、英文学科で45.7%、英語非専攻のその他7学科で26.0%であるのに対し、「3. 中立」は英文学科で34.5%、その他で35.7%、「1. 不要」「2. やや不要」を合わせてアジア言語を不要とするものは、英文学科で19.8%、その他で38.3%、である。平均値は2.82であり、将来不要が相対多数である。

履修言語別に平均値（あるいは相関係数）の大小を比較すると、中・韓・仏・独・英語の順で、平均値が3以上は中・韓語である。相関係数を用いた検定では、仏語以外は、平均値に有意な差がある。

また、英語専攻と英語非専攻の学生間の「将来のアジア言語の必要性」は平均値で0.55の差があり、相関係数を用いた検定では、その差は有意である。自分の将来にアジア言語の必要性を認めている者は、英文学科を主に一定の数がいる。

表-3a 将来のアジア言語の必要性（平均値・相関係数による大小比較と検定）

	全 体	英語専攻	英非専攻	英語履修	独語履修	仏語履修	中語履修	韓語履修
平 均 値	2.817	3.284	2.734	2.508	2.532	2.852	3.220	3.154
標準偏差	1.182	1.105	1.176	1.134	1.157	1.079	1.107	1.217
相関係数		0.166	-0.166	-0.213	-0.081	0.010	0.189	0.124
棄却確率	(検定)	0.0001	0.0001	0.0001	0.0238	0.7767	0.0001	0.0005

(2) 大学教育にアジア言語（中・韓語等）は必要ですか。

「5. 必要」「4. やや必要」を合わせてアジア言語を必要とするものは、英文学科で70.7%、英語非専攻のその他7学科で50.9%であるのに対し、「3. 中立」は英文学科で20.7%、その他で31.2%、「1. 不要」「2. やや不要」を合わせてアジア言語を不要とするものは、英文学科で8.6%、その他で18.0%、である。大学教育にアジア言語の必要性を認めている者は、過半数を占

めており、全体の平均値も3.53である。

履修言語別に平均値（あるいは相関係数）の大小を比較すると、仏・中・韓・英・独語の順で、全て平均値が3以上である。相関係数を用いた検定では、仏語以外は、平均値に有意な差はない。

また、英語専攻と英語非専攻の学生間の「大学教育でのアジア言語の必要性」は平均値で0.54の差があり、相関係数を用いた検定では、その差は有意である。

表-3b 大学教育でのアジア言語の必要性（平均値・相関係数による大小比較と検定）

	全 体	英語専攻	英非専攻	英語履修	独語履修	仏語履修	中語履修	韓語履修
平 均 値	3.532	3.991	3.451	3.453	3.392	4.086	3.511	3.488
標準偏差	1.164	1.063	1.162	1.172	1.174	0.984	1.235	1.031
相関係数		0.166	-0.166	-0.055	-0.041	0.163	-0.010	-0.017
棄却確率 (検定)		0.0001	0.0001	0.1230	0.2602	0.0001	0.7780	0.6444

4.1.4 今後の意向

(1) 継続履修

単位として認定されれば、今後も語学を履修したい者は、英文学科63.8%，非英語専攻のその他7学科56.7%，全体で57.8%である（図-4）。履修言語別には、韓・英・中・仏・独語の順で継続意向が高く、相関係数による検定では、韓国語だけに有意な差があり、韓国語の継続履修が他言語より高いと言える（表-4）。

全言語で過半数の継続意向があり、この「上級クラス」希望を人数で見ると、英語177名、中国語102名、韓国語81名、仏語45名、独語42名である。

(2) もう充分である

今後、大学では語学を継続履修する意思の無い者は、英文学科25.9%，非英語専攻のその他7学科44.5%，全体で41.7%である。履修言語別には、英・韓・中・仏・独語の順だが、相関係数による検定では有意な差はない。

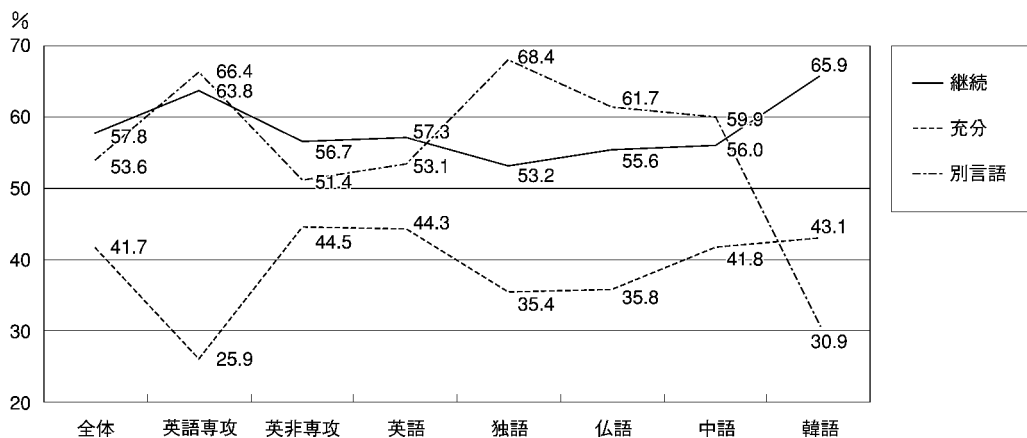


図-4 今後の意向

表－4 今後の意向（相関係数による検定）

	全 体	英語専攻	英非専攻	英語履修	独語履修	仏語履修	中語履修	韓語履修
継 続	相関係数	－0.053	0.053	0.003	0.029	0.013	0.028	－0.073
	棄却確率	0.1411	0.1411	0.9235	0.4170	0.7126	0.4320	0.0431
充 分	相関係数	0.133	－0.133	－0.045	0.042	0.040	0.004	－0.013
	棄却確率	0.0002	0.0002	0.2112	0.2442	0.2662	0.9027	0.7170
別 言 語	相関係数	－0.103	0.103	－0.019	－0.094	－0.050	－0.005	0.150
	棄却確率	0.0042	0.0042	0.5990	0.0092	0.1632	0.8943	0.0001

（相関係数は、1 はい、2 いいえ、としたので、±の符号を逆転させて読むと良い。）

(3) 別言語を履修

単位として認定されれば、他の言語を履修したい者は、英文学科 66.4%，非英語専攻のその他 7 学科 51.4%，全体で 53.6%である。履修言語別には、独・仏・中・英・韓語の順で履修意向が高く、相関係数による検定では、独・韓語に有意な差がある。

韓国語 98 名、英語 70 名、中国語 61 名、イタリア語 58 名、仏語 45 名、スペイン語 34 名、独語 33 名など、30 名単位のクラス編成に相当する「初級ニーズ」がある。

表－5 履修したい別言語

	全 体	英語専攻	英非専攻	英語履修	独語履修	仏語履修	中語履修	韓語履修
英 語	70	0	70	8	13	5	30	14
独 語	33	4	29	16	1	2	8	6
仏 語	45	7	38	23	5	1	13	3
中 国 語	61	8	53	36	5	13	1	6
韓 国 語	98	20	78	51	10	15	20	2
イタリア語	58	18	40	21	6	12	12	7
スペイン語	34	15	19	7	10	2	14	1
ロシア語	9	1	8	1	2	1	5	0
そ の 他	12	3	9	4	0	2	5	1
計	420	76	344	167	52	53	108	40
%	54.3%	65.5%	52.3%	54.0%	65.8%	65.4%	59.3%	32.5%
回答者数	774	116	658	309	79	81	182	123

4.1.5 カリキュラムに関するまとめ

(1) 将来の必要性

学生の将来にとって、英語が必要の平均値は英語専攻 4.41、英語非専攻 3.56 で、3 点を大きく上回っており、英語の必要性は英語非専攻でも過半数を超えている。

ヨーロッパ言語の必要性は、英語専攻 3.14、非専攻 2.30 で、英文学科以外の学生の将来の必要性はかなり小さい。同様に、アジア言語の必要性は、英語専攻 3.28、非専攻 2.73 で、英文学科以外の学生の将来の必要性は小さい。

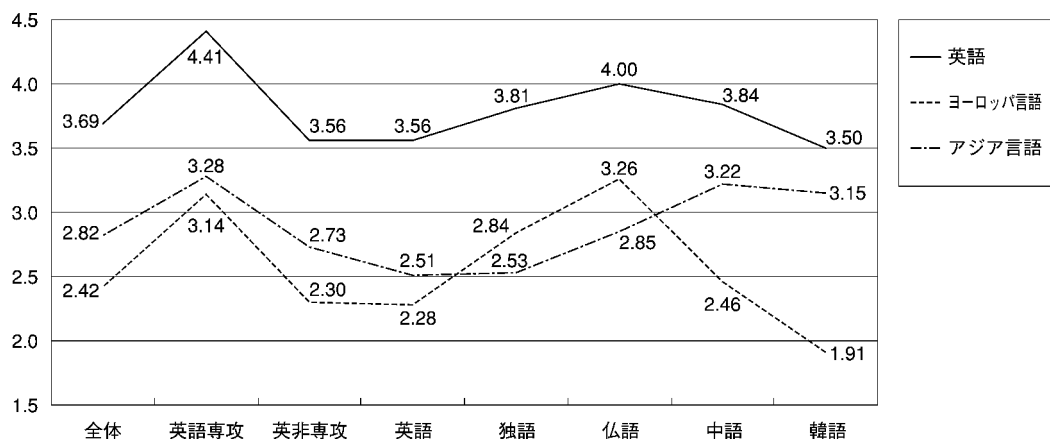


図-5 a 将来の必要性の平均値比較

(2) 大学教育における必要性

大学教育において、英語が必要の平均値は英語専攻 4.61、英語非専攻 3.93 で、全体では 4.03 で、4 点を上回っている。英語を必修とするに十分な「大学教育での必要性」が認識されている。

ヨーロッパ言語の必要性は、英語専攻 3.83、非専攻 3.27 で、アジア言語の必要性は、英語専攻 3.99、非専攻 3.45 である。英文学科の学生にヨーロッパ言語あるいはアジア言語を必修とするに十分な認識がある。英語非専攻の学生の平均値は 3 以上ではあるがあまり大きくはない。

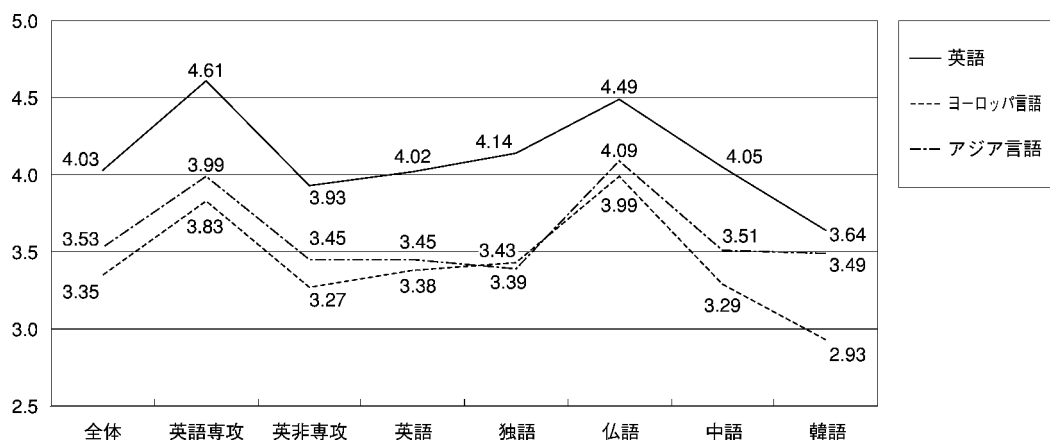


図-5 b 大学教育における必要性の平均値比較

(3) 継続あるいは別言語の履修意向

単位として認定されれば、継続履修の意向があるものは、全言語で 5 割以上ある。「上級クラス」のニーズが大きい。

同様に、単位として認定されれば、別言語を履修意向も、現行の 5 言語にイタリア語、スペイン語を加えた 7 言語に、30 人単位で 1～3 クラスの初級ニーズがある。

(4) ま と め

- 1 大学の英語教育を「必修」とすべきか、約 15%の英語不要学生に「履修しない自由」を与えるべきかは、本学の教育理念と各学部・学科のカリキュラム全体の問題である。
- 2 英語の必修を無くしても、(共通科目外国語の選択に含まれる限り)英語履修者が急激に減少する恐れは少ない。
- 3 ヨーロッパ言語、アジア言語共に、大学語学教育の選択肢として、必要である。特に英文学科のニーズが大きく、英文学科の選択必修は妥当である。
- 4 2年間8単位の履修後に、継続あるいは別言語を「単位」として履修するニーズが相当数ある。
- 5 1・2年次に選択必修科目として「共通科目外国語」は必要であり、3・4年次に継続的「上級語学」、他の「初級語学」の選択肢が、あっても良い。
- 6 スペイン語、イタリア語のラテン系言語のニーズがある。
- 7 言語の種類と学習内容・学習機会の多様化が、求められている。

4.2 ニーズに関して

(1) 将来の必要性

将来のあなたにとっての「英語」「ヨーロッパ言語」「アジア言語」の必要性については、前章(4.1.1.(1), 4.1.2.(1), 4.1.3.(1))を参照されたい。

(2) 選択動機

選択動機は、1. 教養を身につける、2. 将来役に立つ、3. 就職に有利、4. 履修が簡単、5. 資格取得に役立つ、6. 語学スキルの習得、の6設問について、「1. 低いー2. やや低いー3. 中立ー4. やや高いー5. 高い」の5段階評価で問うた。

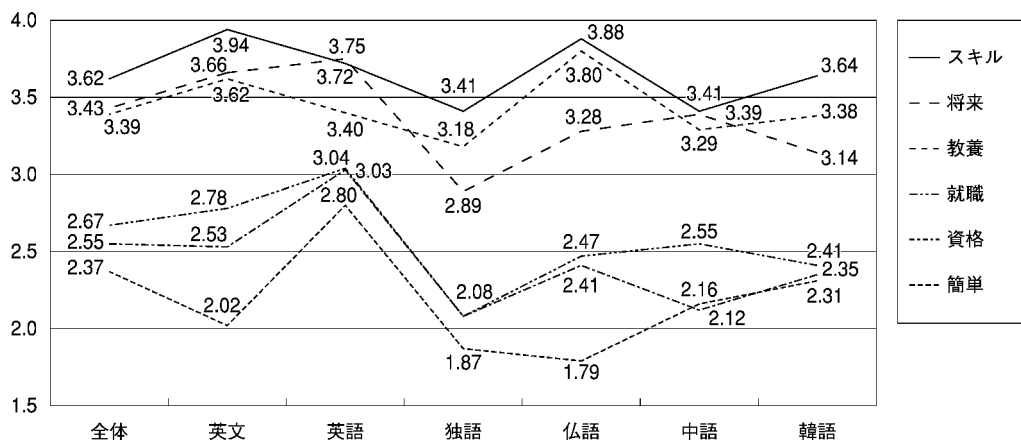


図-6a 履修言語の選択動機(平均値)

図-6a は、履修言語の選択動機の平均値を比較したものである。全体の選択動機第1位は「語学スキルの習得」3.62、第2位「将来役に立つ」3.43、第3位「教養を身につける」3.39で、いずれも平均値が3以上である。一方、第4位「就職に有利」2.67、第5位「資格取得に役立つ」

2.55, 第6位「履修が簡単」2.37は、いずれも3以下である。語学の選択動機は、具体的スキル・将来性・教養を目的としており、健全である。

選択言語別に見ると、英語は、「将来」「スキル」「教養」「就職」「資格」「簡単」の順で、「簡単」以外は3以上の平均点である。独語・仏語・韓国語は、「スキル」「教養」「将来」「就職」「資格」「簡単」の順である。中国語・英文学科は、「スキル」「将来」「教養」「就職」「簡単」「資格」の順である。

図-6bは、履修言語の選択動機と履修言語（及び英文学科）との相関係数を比較したもので、全体と履修言語との（平均値の）乖離と、その差の有意性が検定できる。

i) 平均点3以上の上位3動機について

「スキル」は、(英文)・仏・英・韓・独・中の順で、英文学科・仏語・中国語に全体と有意な差がある（ものの、全体との差異は小さい）。

「将来」は、英・(英文)・中・仏・韓・独の順で、仏語・中国語を除いて、全体と有意な差がある。英語の差異は+で大きく、独語の差異は-で大きい。独語履修者は相対的に将来に役立つと考えて選択してはいない。

「教養」は、仏・(英文)・英・韓・中・独の順で、仏語・英文学科と全体に有意な差がある（ものの、全体との差異は小さい）。

ii) 平均点3未満の下位3動機について

「就職」は、英・(英文)・中・仏・韓・独の順で、英語・独語・韓国語と全体に有意な差がある。英語の差異は+で大きく、相対的に就職に有利と考えて選択するものが多い。

「資格」は、英・(英文)・仏・韓・独・中の順で、英語・中国語・独語と全体に有意な差がある。英語の差異は+で大きく、相対的に「資格取得」動機で選択するものが多い。選択動機が資格取得と最も遠いのは、中国語である。

「簡単」は、英・韓・中・(英文)・独・仏の順で、韓国語以外は全体と有意な差がある。英語の差異は+で大きく、「履修簡単」動機で選択するものが多い。仏語・独語は-が大きく、履修が難しいと考えて選択されている。

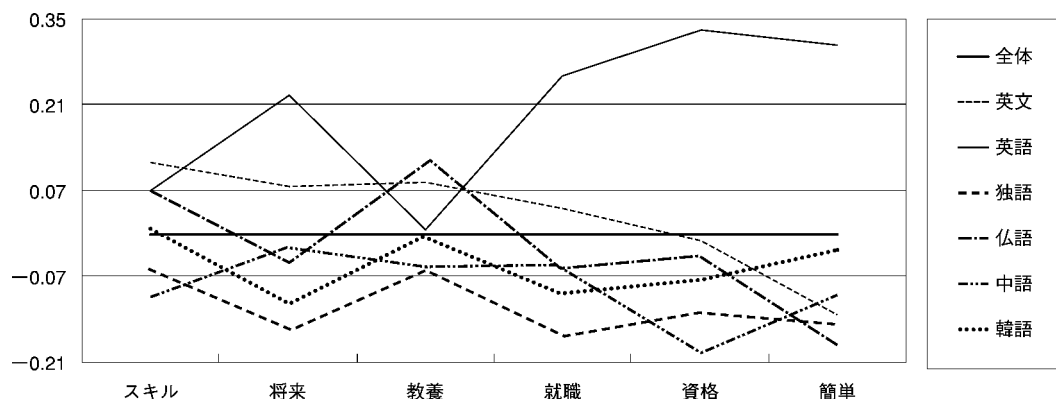


図-6b 選択動機の相関係数比較・検定 ($-0.072 < \text{棄却域} < 0.072$)

(3) 到達目標

到達目標は、1. 海外旅行・短期留学, 2. 長期留学・海外生活, 3. 日常会話コミュニケー

ション, 4. Eメールでのコミュニケーション, 5. インターネットで情報入手, 6. インターネット
で情報発信, 7. 学術論文の読み書き, 8. 音楽を原語で楽しむ, 9. 映画を原語で楽し
む, 10. 小説などを原語で読む, の 10 設問である。

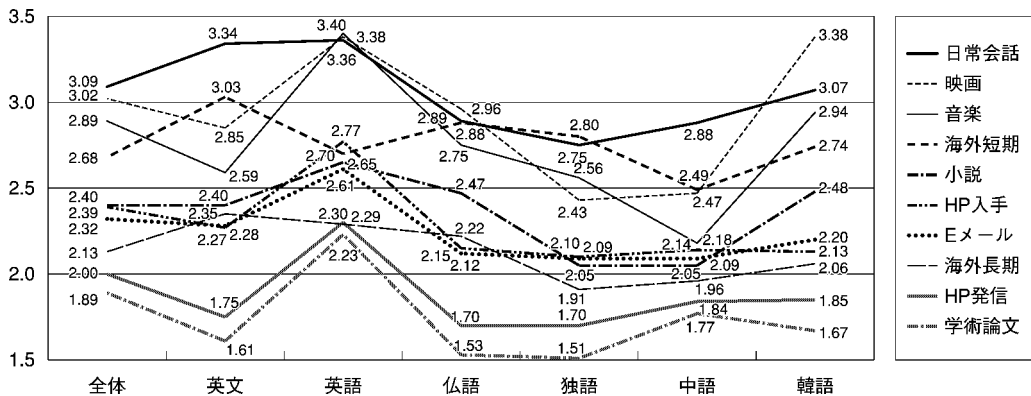


図-7a 履修言語の到達目標 (平均値)

全体では, 到達目標の第 1 位「日常会話」3.09, 第 2 位「映画」3.02 の 2 つだけが平均値 3 以上である。第 3 位「音楽」2.89, 第 4 位「海外短期」2.68, 第 5 位「小説」2.40, 第 6 位「メディア入手」2.39, 第 7 位「Eメール」2.32, 第 8 位「海外長期」2.13, が平均点 2 点台。第 9 位「メディア発信」1.99, 第 10 位「学術論文」1.89, が平均点 2 点以下である。

言語・専攻別に平均値が 3 点以上のものを見ると, 英語の「音楽」「映画」「日常会話」, 韓国語の「映画」「日常会話」, 英文学科では「日常会話」「海外短期」である。

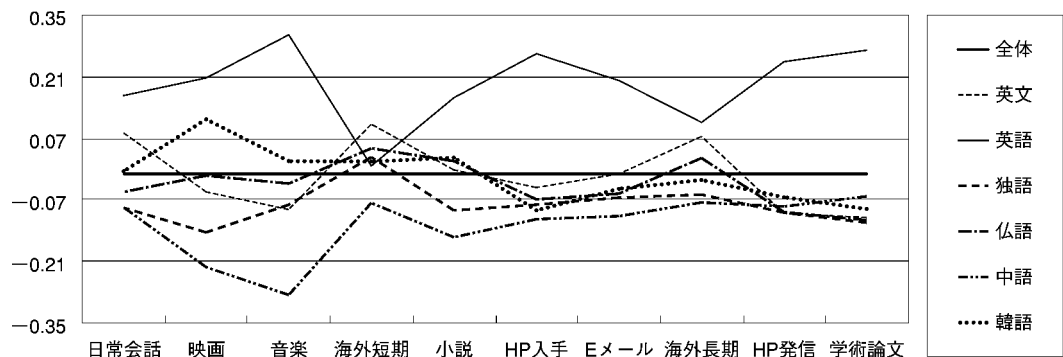


図-7b 到達目標の相関係数比較・検定 ($-0.072 < \text{棄却域} < 0.072$)

図-7b は, 履修言語の到達目標と履修言語 (及び英文学科) との相関係数を比較したもので, 全体と履修言語との (平均値の) 乖離と, その差の有意性が検定できる。

i) 平均点 3 以上の上位 2 動機について

「日常会話」は, 英・(英文)・韓・仏・中・独の順で, 韓国語・仏語以外に全体と有意な差がある (ものの, 全体との差異は小さい)。

「映画」は, 英・韓・仏・(英文)・独・中の順で, 仏語・英文学科以外に全体と有意な差がある。

英語は＋でやや大きな、韓国語は＋の小さな、独語は－の小さな、中国語は－でやや大きな差異がある。英語・韓国語の「映画」目標は相対的に高く、中国語・独語の「映画」目標は、相対的に低い。

ii) 平均点2点台の中位6動機について

「音楽」は、英・韓・仏・独・(英文)・中の順で、仏語・韓国語以外に全体と有意な差がある。英語は＋で大きな、中国語は－で大きな差異がある。

「海外短期」は、(英文)・仏・独・韓・英・中の順で、英文学科・中国語に全体と有意な差がある。英文学科は＋で小さな、中国語は－で小さな差異がある。言語間の差異は小さい。

「小説」は、英・韓・仏・(英文)・独・中の順で、英語・中国語・独語に全体と有意な差がある。英語は＋でやや大きな、独語は－で小さな、中国語は－でやや大きな差異がある。

「HP 入手」は、英・(英文)・仏・独・韓・中の順で、英語だけに全体と有意な＋の差異がある。他の言語間との差異は小さく、中国語・韓国語・独語と小さな－の差異がある。

「E メール」は、英・(英文)・韓・仏・独・中の順で、英語だけに全体と有意な＋の差異が、中国語だけに有意な－の差異がある。他の言語間との差異は小さい。

「海外長期」は、英・(英文)・仏・韓・独・中の順で、英語・英文学科と有意な＋の差異が、中国語に有意な－の差異がある。他の言語間との差異は小さい。

iii) 平均点2点未満の下位2動機について

「HP 発信」は、英・韓・中・仏・独・(英文)の順で、英語と有意な＋の差異が、韓国語以外の言語と全体に有意な－の小さな差異がある。

「学術論文」は、英・中・韓・(英文)・仏・独の順で、英語と有意な＋の大きな差異が、中国語以外の言語と全体に有意な－の小さな差異がある。

以上のように、履修言語の到達目標は、現実的である、と言える。

(4) ニーズ主成分分析

以上の、「将来の必要性3」「選択動機6」「到達目標10」計19項目の語学履修ニーズ設問を、総合的に把握するため、主成分分析を行った。そこから、情報量の大きい主成分について「意味」を考察し、さらに、それらの主成分得点について、言語間・学科間（英語専攻・非専攻）の平均値を比較した。⁽¹⁾

i) 固有値

表-6a 固有値

	PRIN 1	PRIN 2	PRIN 3	PRIN 4	PRIN 5	PRIN 6	PRIN 7	PRIN 8
固有値	6.980	2.053	1.557	1.176	0.956	0.906	0.680	0.613
差	4.927	0.496	0.381	0.220	0.050	0.226	0.066	0.029
寄与率	36.7%	10.8%	8.2%	6.2%	5.0%	4.8%	3.6%	3.2%
累積寄与率	36.7%	47.5%	55.7%	61.9%	67.0%	71.7%	75.3%	78.5%

19変量なのでPRIN 1～PRIN 19の19個の主成分が得られる。その中で、固有値1以上のものはPRIN 1～PRIN 4だが、PRIN 6とPRIN 7に格差があるので、第6主成分まで見ることになると、6個の主成分で19変量の持つ情報量の71.7%を要約する。

ii) 固有ベクトル

表-6b 固有ベクトル

	PRIN 1	PRIN 2	PRIN 3	PRIN 4	PRIN 5	PRIN 6	PRIN 7	PRIN 8
将来英必要	0.150	0.344	-0.306	0.216	-0.144	0.142	0.010	-0.026
将来欧必要	0.162	0.277	-0.311	0.338	-0.104	0.244	0.334	0.004
将来亜必要	0.163	0.333	-0.254	0.186	-0.126	0.200	-0.264	0.163
教養	0.184	0.263	0.113	-0.339	-0.076	-0.242	0.599	0.301
将来役立	0.225	0.335	0.168	-0.117	-0.133	-0.241	-0.194	-0.156
就職有利	0.221	0.229	0.370	0.093	-0.023	-0.091	-0.123	-0.517
履修簡単	0.098	-0.001	0.499	0.323	0.307	0.324	0.057	0.495
資格取得	0.215	0.143	0.416	0.165	0.137	0.175	-0.032	-0.115
スキル習得	0.229	0.296	0.087	-0.309	-0.008	-0.187	-0.021	0.172
海外短期	0.221	-0.005	-0.274	-0.067	0.620	-0.137	0.081	0.039
海外長期	0.252	-0.093	-0.188	0.100	0.500	-0.142	0.081	-0.275
日常会話	0.280	0.000	-0.136	-0.112	0.149	-0.037	-0.387	0.167
Eメール	0.286	-0.178	-0.054	0.123	-0.144	-0.217	-0.256	0.200
HP入手	0.269	-0.259	-0.006	0.146	-0.227	-0.236	-0.025	0.224
HP発信	0.266	-0.286	0.018	0.247	-0.204	-0.239	0.035	0.088
学術論文	0.238	-0.257	0.058	0.239	-0.114	-0.064	0.294	-0.231
音楽	0.256	-0.191	0.008	-0.335	-0.085	0.340	-0.128	0.015
映画	0.270	-0.148	-0.028	-0.346	-0.028	0.424	-0.043	-0.044
小説	0.268	-0.197	-0.040	-0.159	-0.155	0.292	0.260	-0.210

PRIN 1～PRIN 6の固有ベクトルの19変量のウェイトから、各主成分の意味を読み取ることができる。

- ・第1主成分 (PRIN 1)；到達目標を中心に、選択動機・必要性まで、全て+の似通ったウェイトであるので、「総合的・目標的」ニーズである。1個の主成分で19変量の持つ全情報量の36.7%を要約する。ある意味で、本学の学生の言語履修ニーズの大きさの総合評価 (19変量の加重平均点のようなもの) と言える。
- ・第2主成分 (PRIN 2)；将来必要・将来役立つ、次いでスキル・教養のウェイトが+で大きく、インターネット・学術論文、次いで趣味のウェイトが-でやや大きいので、第2主成分得点の (+) 側で「将来的・教養・技術的」ニーズ、(-) 側で「インターネット・論文」ニーズである。情報量の10.8%を要約する。
- ・第3主成分 (PRIN 3)；履修簡単・資格取得・就職有利のウェイトが+で大きく、将来必要、次いで海外短期・海外長期のウェイトが-でやや大きいので、第3主成分得点の (+) 側で「現代的・功利的」ニーズ、(-) 側で「将来的・海外」ニーズである。情報量の8.2%を要約する。
- ・第4主成分 (PRIN 4)；欧米将来・簡単・インターネット・論文等が+で、趣味・教養・スキル等が-であり、第4主成分得点の (+) 側で「将来的・インターネット」ニーズ、(-) 側で「趣味・教養」ニーズである。情報量の6.2%を要約する。
- ・第5主成分 (PRIN 5)；海外短期・海外長期、次いで簡単のウェイトが+でかなり大きいので、

「海外・簡単」ニーズである。(同, 5%)

- ・第6主成分 (PRIN 6)；趣味・簡単の+ウェイトが大きいのので, 「趣味・簡単」ニーズである。(同, 4.8%)

iii) 主成分得点の平均点比較

履修言語別 (図-8 a) に見ると,

- ・PRIN 1；「総合的目標」得点は, 英・仏・韓・中・独の順で, 英語だけが+で大きく, 独語・中国語はかなり低いニーズ得点である。
- ・PRIN 2；「(+) 将来的・教養・技術的」は, 仏・中・独の順, 「(-) インターネット・論文」は, 英・韓の順。仏語・中国語の (+) が高いのは, 英文学科の履修者が多いことによる。
- ・PRIN 3；「(+) 現在的・功利的」は, 英語のみ。「(-) 将来的・海外」は, 独・仏・中・韓の順。
- ・PRIN 4；「(+) 将来的・インターネット」は, 中・独の順, 「(-) 趣味・教養」は, 韓・仏の順。
- ・PRIN 5；「海外・簡単」は, 韓国語, (-) は中国語。
- ・PRIN 6；「趣味・簡単」は, 韓国語, (-) は中国語。

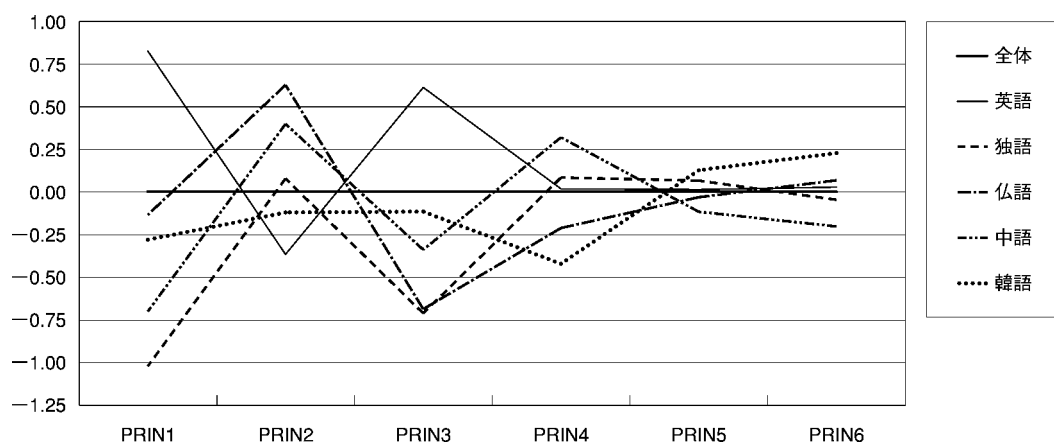


図-8 a 主成分得点の履修言語別平均点

学科別 (図-8 b) に見ると,

- ・PRIN 1；「総合的・目標的」ニーズが高いのは心理応用コミュニケーション・福祉心理・英文学科, 低いのは福祉計画・福祉臨床・経済法学科である。
- ・PRIN 2/3 (-)；「将来的・教養・技術的・海外」ニーズが高いのは英文学科,
- ・PRIN 2 (-)；「インターネット・論文」ニーズが高いのは経済法学科,
- ・PRIN 3；「現在的・功利的」ニーズが高いのは経済学科, である。

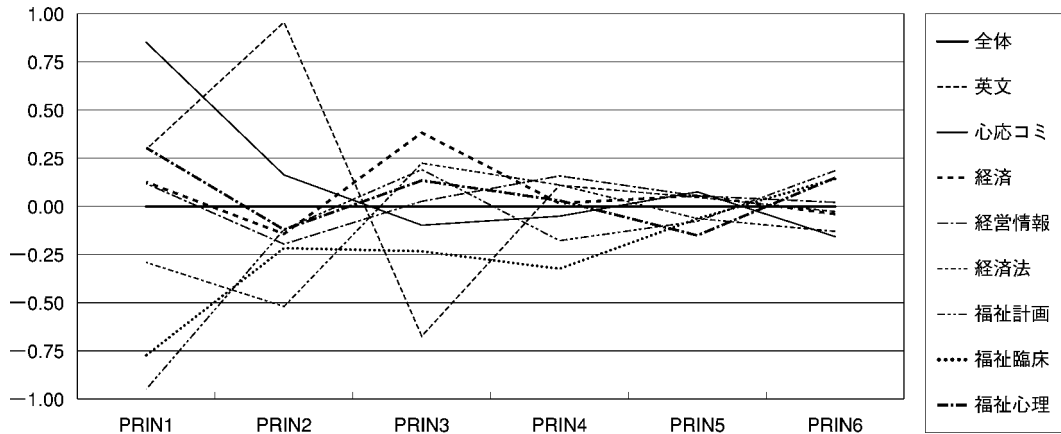


図-8b 主成分得点の学科別平均点

(5) ニーズ分析まとめ

- 1 「総合的・目標的」ニーズが、本学学生の代表的（平均的）ニーズであり、学科による「総合的・目標的」ニーズ得点の差は、学科専攻における外国語（特に英語）の必要性の大小（心理学＞英文学＞経済学・経営学＞法学＞社会福祉）を反映している（ようである）。
- 2 （英文学科を除く）英語非専攻の学生は、学科専攻における英語の必要性や英語履修による得失と、他の言語選択の効用や得失を比較考量して、履修言語を決定している。
- 3 英語選択の効用には、「インターネット・論文」ニーズ、簡単・資格・就職等の「現代的・功利的」ニーズがある。
- 4 韓国語選択には、「インターネット・（論文）」ニーズ、冬のソナタ、韓国旅行、容易等の「趣味・教養・海外・簡単」ニーズがある。
- 5 中国語選択には、「将来的・教養・技術的・インターネット」ニーズがある。
- 6 仏語選択には、「将来的・教養・技術的・海外・趣味」ニーズがある。
- 7 独語選択には、顕著なニーズはない。
- 8 英文学科の学生は、「将来的・教養・技術的・海外的」ニーズから、仏語・中国語を選択している。

4.3 評価に関して

4.3.1 言語能力の変化

図-9は、話す・聞く・読む・書く・単語（語彙）・発音・文法・文化理解の言語能力の変化について、履修前と比べて「1. 減退-2. やや減退-3. 不変-4. やや増進-5. 増進」の5段階評価で問うた平均値（数値は表-7）と、属性別（履修言語・英文学科）相関係数である。

全体では、文化・読む・聞く（3.5以上）、話す・書く・発音（3.3以上）、単語・文法（3.2以上）と、8言語能力全てにおいて平均値が3以上であり、平均的に言って本学の語学教育は成果を上げている。

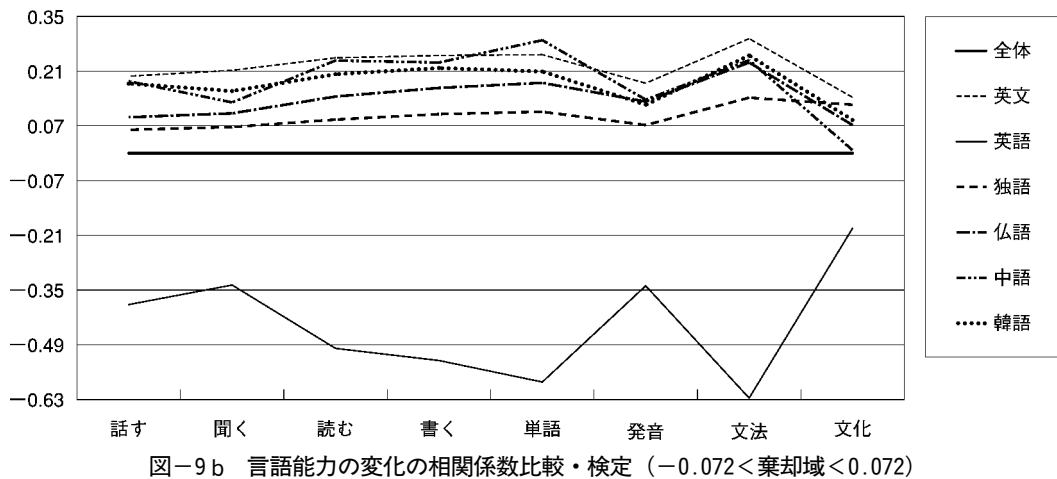
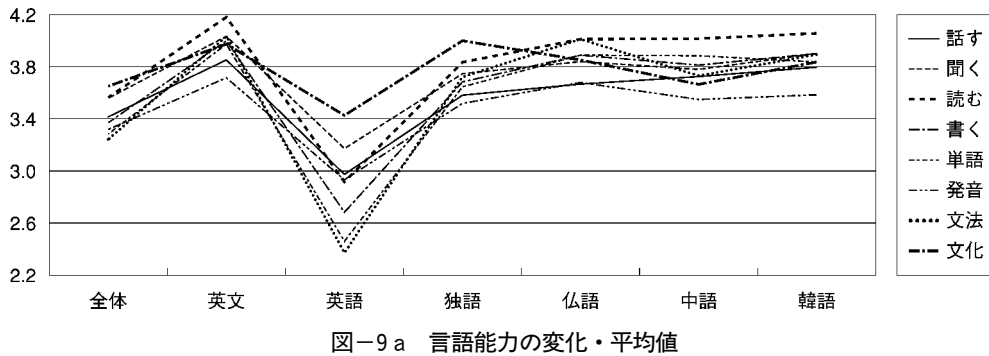


表-7 言語能力の変化・平均値

	話す	聞く	読む	書く	単語	発音	文法	文化
全 体	3.416	3.559	3.565	3.371	3.284	3.319	3.243	3.651
英 文	3.853	4.034	4.181	4.000	3.974	3.716	4.034	3.974
英 語	2.974	3.172	2.916	2.683	2.460	2.932	2.372	3.427
独 語	3.582	3.747	3.835	3.684	3.646	3.519	3.722	4.000
仏 語	3.667	3.840	4.012	3.889	3.889	3.679	4.012	3.852
中 語	3.725	3.780	4.016	3.813	3.885	3.549	3.731	3.665
韓 語	3.797	3.902	4.057	3.902	3.837	3.585	3.894	3.837

(1) 英語

他の4言語と異なり、英語は中学・高校から6年学んだ後の大学英語教育の成果であり、減退する可能性もある。事実、平均値が3以上のものは文化3.43、聞く3.17の2能力だけで、話す・発音・読むが2.9点台でほぼ横ばいではあるものの、書く2.68、単語2.46、文法2.37の3技能の減退が著しい。

能力毎に、全体(初習4言語)との相対的乖離を相関係数で見ると、一の相関の大きい順に、文法・単語・書く・読む・話す・発音・聞く・文化となっている。この言語能力の減退の著しい「文

法・単語・書く・読む」技術は、中・高英語教育（受験英語？）で伝統的に重視され、訓練されてきた言語能力である。一方、言語能力が増進ないし横ばいの「文化・聞く・発音・話す」技術は、本学の共通科目・英語で重点的に教育しているコミュニケーションに必要な言語能力である。

大学での2年間の英語履修を経て、英語の言語能力が減退したと評価する背後には、中・高6年間で染み込んだ英語能力観を尺度としてコミュニケーション重視の英語教育の成果を測ろうとする、あるいは、コミュニケーションの現場で受験英語の文法や語彙の使い方が役立たなかったり、聞く・発音能力が思うように増進しないなど、中・高・大学の英語教育体系の一貫性の欠如があると考えられる。

(2) その他の言語（独・仏・中・韓語）

初習が一般的な独・仏・中・韓語では、（高校などで既習の学生を除いて）能力が減退する可能性は論理的に小さい。事実、言語別に平均値を見ると、独語 4.00～3.52 点、仏語 4.01～3.67 点、中国語 4.02～3.55 点、韓国語 4.06～3.59 点、であり、いずれも言語能力が増進している。

相関係数による順位を見ると、独語は文法・文化・単語・書く・読む・発音・聞く・話す、仏語は文法・単語・書く・読む・発音・聞く・話す・文化、中国語は単語・文法・読む・書く・話す・発音・聞く・文化、韓国語は文法・書く・単語・読む・話す・聞く・発音・文化、の順で、若干の異動を除くと、4言語の全てで「文法・単語・書く・読む」が上位にランクされている。これは、初習外国語であっても、英語と同様に、語学を中・高英語教育と同じ態度で学ぼうとし、同じ尺度で評価していることを示すのだろうか。（それとも、英語の上記4能力の著しい減退の、裏返しに過ぎないのか。）

4.3.2 満足度

図-10 は、面白い・やりがい・8単位分量・到達目標に役立った・積極的に受講した・良く理解できた・色々と応用できた、の7つの満足度について、そう「1. 思わない-2. やや思わない-3. 中立-4. やや思う-5. 思う」の5段階評価で問うた、平均値と属性別（履修言語・英文学科）相関係数である。

全体では、面白い 3.71、やりがい 3.49、積極的 3.42、8単位分 3.40、理解 3.22、応用 2.76、目標達成 2.74、

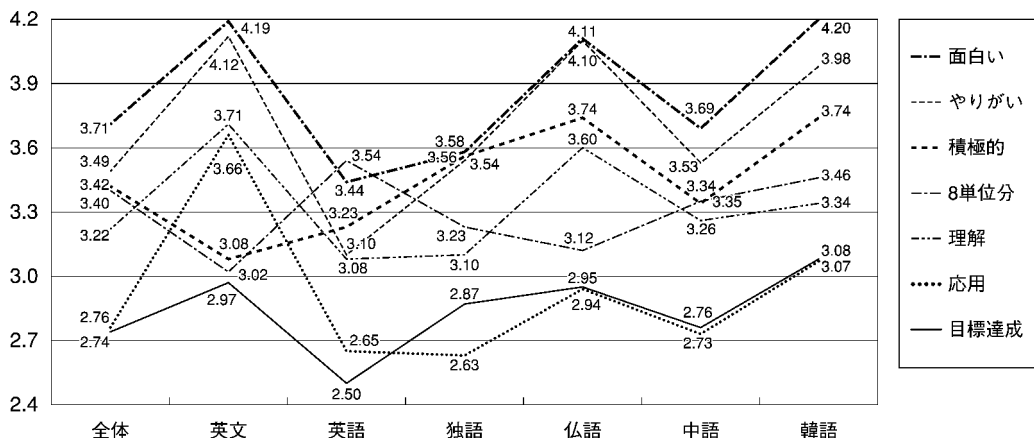
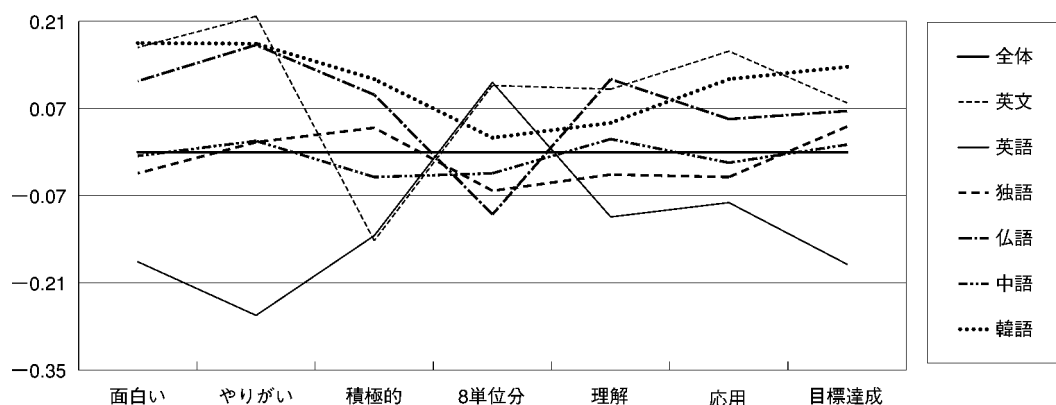


図-10 a 満足度・平均値

図-10b 満足度の相関係数比較・検定 ($-0.072 < \text{棄却域} < 0.072$)

目標達成 2.74, となっており, 面白さ・やりがい・積極性などの総体的満足度と, 8単位分の量的満足度では概ね満足であるのに対し, 応用力・目標達成など具体的満足度はやや低くなっている。

項目毎に, 全体と各言語の相対的乖離を相関係数で見ると,

- ・面白；相対的に満足度の高いのは韓・仏語で, 満足度が低いのは英語である。
- ・やりがい；相対的に満足度が高いのは韓・仏語で, 低いのは英語である。
- ・積極的；相対的に満足度が高いのは韓・仏語で, 低いのは英語である。
- ・8単位分；相対的に満足度が高いのは英語で, 低いのは仏語である。
- ・理解；相対的に満足度が高いのは仏語で, 低いのは英語である。
- ・応用；相対的に満足度が高いのは韓国語で, 低いのは英語である。
- ・目標達成；相対的に満足度が高いのは韓国語で, 低いのは英語である。

となっている。

英語が全般的に低い満足度であるのは, 他の初習外国語に比べて新鮮味に欠けるためなのか, あるいは, 相対的に高い到達目標に対して達成感に欠けるのか, もしくは, 中・高時代の英語学習とのギャップのためか, それともシラバスや教授法に問題があるのか, 分析が必要である。そこで, 次に教授法について, 見る事にする。

4.3.3 教材・授業評価

図-11 は, 目標に合致していた・易しい教材だった・応用力を育てる教材だった・言語活動中心の授業だった・説明中心の授業だった, の5つの教材・授業評価について, そう「1. 思わない-2. やや思わない-3. 中立-4. やや思う-5. 思う」の5段階評価で問うた, 平均値と属性別 (履修言語・英文学科) 相関係数である。

i) 目標に合致していた

平均点で言語間を比較すると, 仏・韓・中・独・英語の順であり, 英語だけが3以下で目標にやや合致していない。相関係数で全体との乖離を見ると, 仏・韓 (・中) 語が目標合致度がやや高く, 英語の合致度が低い。

ii) 易しい

平均点で言語間を比較すると, 英・中・韓・独・仏語の順であり, 英語だけが3以上で易しく,

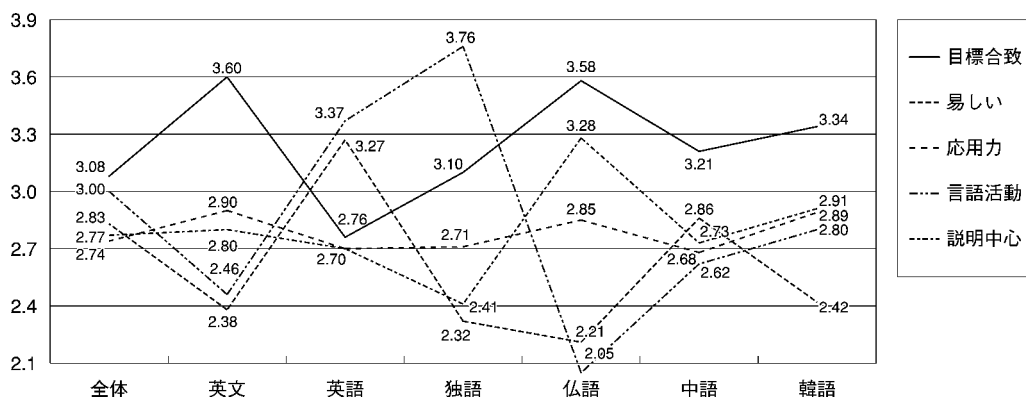


図-11 a 教授法・平均値

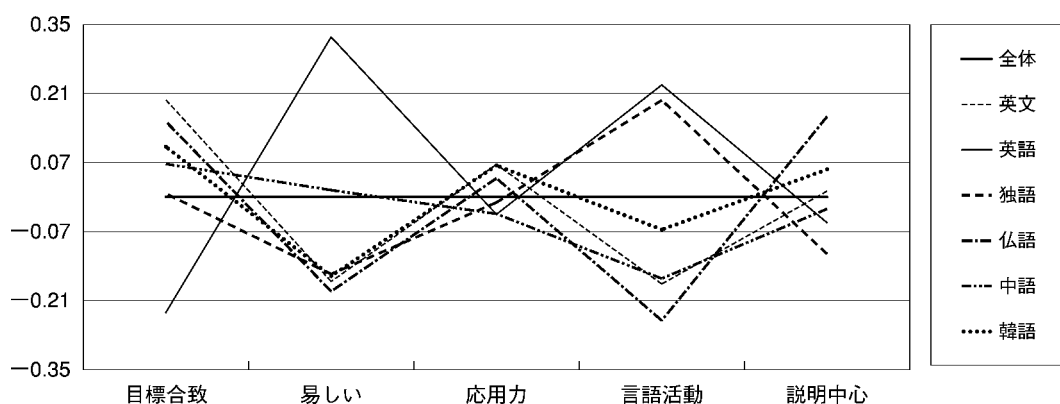


図-11 b 教授法の相関係数比較・検定 (-0.072 < 棄却域 < 0.072)

仏・独・韓語は易しくない。相関係数で全体との乖離を見ると、英語がかなり大きな+で「易しい」と評価されており、仏・韓・独語の順に「やや難しい」。

iii) 応用力

平均点は、5言語共 2.68～2.89 の範囲にあり、言語間に有意差はない。

iv) 言語活動

平均点で言語間を比較すると、独・英語（3以上）、韓・中・仏語（3以下）の順である。相関係数で全体との乖離を見ると、英・独語の+が大きく、仏・中語の-が大きい。

v) 説明中心

平均点で言語間を比較すると、仏語（3以上）、韓・中・英・独語（3以下）の順である。相関係数で全体との乖離を見ると、仏語の+が大きく、独語の-がやや大きい。

英語について見ると、教材・授業評価の単純集計（平均値及び属性との相関係数）レベルで見ると、英語の全般的な低い満足度評価は、学生の目標に合致しない、易しい教材・授業に対する漠然とした不満のようである。しかし、学生の評価では「目標に合致しない」「易しい」教材・授業の結果、2年間8単位の履修の「満足度」が低かったり、「言語能力」の増進に寄与していないようなことがあれば、教育機関として失格であろう。

そこで、最後に、調査目的4「言語能力の増進や授業の満足度は、学生のスタンス・ニーズ・

授業内容等とどのように関係しているのか (ないのか)」を分析することにしよう。

4.3.4 言語能力の増進や授業履修の満足度の要因分析

(1) 分析手法

手法の概要は3.3. 集計・解析手法で述べた通りである。具体的には、主要な設問から、6群、43問の変量を取り出し、6群別に主成分分析を用いて要約統計量である主成分得点データを生成し、そこから、より少ない説明変数による重回帰モデルを立てて、「言語能力の変化」や「授業満足度」に寄与する要因を抽出する。

設問群は、A.「好き・得意」4問、C.「動機・選択」8問、E.「到達目標」10問、F.「言語能力変化」8問、G.「満足度」7問、H.「教材・教育」6問 (選択時の配布説明資料を含む) の6群である。

多変量のデータを要約するため、各設問群について主成分分析を行い、要約効率の高い固有値1以上の主成分を、回帰分析の説明変数として採用することとした。その結果、

A.「好き・得意」は第1主成分 (以下「好き pr 1」と表記)

C.「動機・選択」は第1主成分「動機 pr 1」、第2主成分「動機 pr 2」

E.「到達目標」は第1主成分「目標 pr 1」、第2主成分「目標 pr 2」、第3主成分「目標 pr 3」

F.「能力変化」は第1主成分「能力 pr 1」

G.「満足度」は第1主成分「満足 pr 1」

H.「教材・教育」は第1主成分「教育 pr 1」、第2主成分「教育 pr 2」、第3主成分「教育 pr 3」の合計11個の主成分による要約統計量 (主成分得点) データを得た。

幸にも、F.「能力変化」とG.「満足度」については、それぞれ1つの主成分しか抽出されなかったため、「能力 pr 1」「満足 pr 1」はそれぞれ、「能力変化」と「満足度」の総合指標 (一種の加重平均値) とみなすことができる。そこで、I.「能力 pr 1」を被説明変数とし他の10個の主成分得点を説明変数とする「能力モデル」と、II.「満足 pr 1」を被説明変数とし他の10個の主成分得点を説明変数とする「満足モデル」⁽³⁾、の2つの重回帰モデルを立てることができる。

群別主成分分析の各固有ベクトルより、説明変数の意味は以下の通りである。⁽⁴⁾

「好き pr 1」; 固有値 2.408, 要約量 60.2%, 「好き・得意の総合的指標」

「動機 pr 1」; 固有値 3.060, 要約量 38.2%, 「総合的動機」

「動機 pr 2」; 固有値 1.346, 要約量 16.8%, 「+ 目先の利益動機」「- 主体的教養技術動機」

「目標 pr 1」; 固有値 5.384, 要約量 53.8%, 「総合的目標」

「目標 pr 2」; 固有値 1.080, 要約量 10.8%, 「+ 海外目標」「- インターネット・学術論文」

「目標 pr 3」; 固有値 1.000, 要約量 10.0%, 「+ 海外・インターネット」「- 趣味」

「教育 pr 1」; 固有値 1.690, 要約量 28.2%, 「目標合致・応用力・言語活動型」

「教育 pr 2」; 固有値 1.175, 要約量 19.6%, 「+ 説明中心・目標合致」「- 言語活動・易しい」

「教育 pr 3」; 固有値 1.175, 要約量 19.6%, 「+ 易しい・説明中心」「- 配布資料・言語活動」

「能力 pr 1」; 固有値 5.379, 要約量 67.2%, 「能力変化の総合的指標」

「満足 pr 1」; 固有値 3.883, 要約量 55.5%, 「満足度の総合的指標」

(2) 重回帰分析結果

モデルは、5言語全てのF値が十分大きく、有意である。しかし、(修正)決定係数は、中国語

能力モデルで 0.3, その他は 0.5~0.7 程度で、大きくはなく、モデルの 10 変数以外に、各言語能力の変化に寄与する要因が残されている（のは当然である）。

表-8 a 決定係数とモデル検定

I. 能力モデル				II. 満足モデル			
	Adj. Rsq.	F 値	棄却確率		Adj. Rsq.	F 値	棄却確率
英 語	0.4729	28.727	0.0001	英 語	0.5284	35.626	0.0001
独 語	0.5131	9.324	0.0001	独 語	0.6010	12.902	0.0001
仏 語	0.5357	10.347	0.0001	仏 語	0.7137	21.197	0.0001
中国語	0.2963	8.664	0.0001	中国語	0.5955	27.795	0.0001
韓国語	0.5617	16.762	0.0001	韓国語	0.5802	17.998	0.0001

表-8 b 能力モデルの推計結果（陰付部分は t 値が小さく有意ではない）

	好き pr 1	動機 pr 1	動機 pr 2	目標 pr 1	目標 pr 2	目標 pr 3	教育 pr 1	教育 pr 2	教育 pr 3	満足 pr 1
英 語	0.068	-0.107	-0.371	-0.124	0.065	0.119	0.448	0.494	-0.270	0.651
t 値	0.86	-1.42	-3.60	-2.22	0.63	1.13	3.84	4.83	-2.26	8.09
独 語	-0.012	-0.163	0.008	0.008	0.144	-0.307	0.466	-0.302	-0.436	0.441
t 値	-0.10	-1.29	0.05	0.08	0.79	-1.58	2.73	-1.42	-2.94	3.88
仏 語	0.046	-0.021	-0.064	-0.083	0.183	0.092	0.052	0.283	0.091	0.608
t 値	0.31	-0.15	-0.38	-0.91	1.06	0.54	0.31	1.98	0.49	4.63
中国語	0.273	-0.254	-0.227	-0.077	-0.084	0.256	-0.119	0.091	0.152	0.577
t 値	2.85	-2.62	-2.04	-1.26	-0.64	1.92	-1.05	0.73	1.18	6.70
韓国語	-0.005	-0.148	-0.237	-0.041	0.450	-0.039	0.417	0.343	-0.056	0.573
t 値	-0.05	-1.39	-1.93	-0.56	2.94	-0.28	3.51	2.21	-0.42	6.26

表-8 c 満足モデルの推計結果（陰付部分は t 値が小さく有意ではない）

	好き pr 1	動機 pr 1	動機 pr 2	目標 pr 1	目標 pr 2	目標 pr 3	教育 pr 1	教育 pr 2	教育 pr 3	能力 pr 1
英 語	0.162	0.042	-0.131	0.035	-0.007	-0.039	0.535	0.073	0.047	0.276
t 値	3.19	0.85	-1.92	0.95	-0.10	-0.56	7.50	1.06	0.61	8.09
独 語	0.175	0.084	-0.038	0.028	-0.012	0.073	0.525	-0.046	0.403	0.406
t 値	1.59	0.69	-0.24	0.31	-0.07	0.39	3.27	-0.22	2.82	3.88
仏 語	0.372	0.257	-0.278	0.090	-0.065	-0.156	0.306	-0.110	0.280	0.381
t 値	3.41	2.36	-2.14	1.25	-0.48	-1.16	2.37	-0.95	1.96	4.63
中国語	-0.012	0.402	0.000	0.088	0.113	-0.134	0.567	-0.116	0.067	0.359
t 値	-0.15	5.62	0.00	1.85	1.10	-1.27	7.19	-1.16	0.66	6.70
韓国語	0.180	0.149	-0.128	0.113	-0.166	-0.224	0.230	0.171	0.085	0.450
t 値	1.95	1.59	-1.16	1.75	-1.19	-1.82	2.12	1.23	0.72	6.26

i) 英語

I. 能力モデル

10 個の説明変数の内、t 値が十分大きく有意なものは、「満足 pr 1」0.65, 「教育 pr 2」0.49, 「教育 pr 1」0.45, 「動機 pr 2」-0.37, 「教育 pr 3」-0.27, 「目標 pr 1」-0.12, の 6 変数である。英語の言語能力の増進に最も寄与している要因は、授業満足度の高さである。次に寄与度の高い

要因は教育内容で、「説明中心・目標合致型」と「目標合致・応用力・言語活動型」の授業が大きく、「配布資料・言語活動型」はやや小さい寄与度である。教材・授業評価(4.3.3)では英語は比較的「言語活動型」であるものの、英語教育の成果は、授業が目標に合致しているかどうか最も重要であり、授業方法を説明中心・言語活動のいずれに捉えても、言語能力の増進に差はない。配布資料・言語活動型に小さいながら寄与が認められることから、事前の資料で英語教育の方針・内容を理解して英語を選択したものに、言語活動型の教育効果が認められる。

ニーズとの関係は「主体的教養技術動機」にやや大きな寄与があるが、「総合的動機」は説明力が無い。また、「総合的到達目標」にやや小さなマイナスの寄与があるだけで、その他の目標要因に説明力は無い。主体性を持って語学スキルの獲得を目指して英語を選択した学生に、言語能力の増進が認められ、高すぎる到達目標は能力増進にややマイナスである。

II. 満足モデル

10個の説明変数の内、t値が十分大きく有意なものは、「教育 pr 1」0.54、「能力 pr 1」0.28、「好き pr 1」0.16の3変数である。英語教育の満足度は、目標合致・応用力・言語活動型の授業の寄与度が最大である。

ii) 独語

独語教育は、授業そのものが、能力増進と満足度に、大きく寄与している。

能力モデルでは、「応用力・言語活動型」の授業が、能力増進に寄与し、満足モデルでは、「言語活動型＝参加型」をベースに、「易しい・説明型」授業が、満足度に寄与している。

iii) 仏語

仏語教育による能力増進は、このモデルの10変数の中では、満足度だけに依存している。辛うじて、「説明中心・目標合致」型授業が貢献している。

満足度は、語学の得意な、履修動機の高い学生(英文学科)が、「目標合致・応用力型」授業の中で、言語能力を増進させた結果、と言える。

iv) 中国語

中国語教育の能力モデルは、棄却されないものの、決定係数が極めて低く、能力増進に寄与する主要な要因の抽出には成功していない。恐らく、中国語教育が、言語活動型教材と説明中心傾向の授業で混乱しているのであろう。

満足モデルは要因抽出に概ね成功している。履修選択動機の高い(英文学科の)学生を中心に、目標合致・応用力・言語活動型の授業で、言語能力が増進した場合に満足度は高く、そうでない場合には低い。総合的動機の寄与度が比較的大きいことに、中国語の特徴がある。語学をまじめに学習すること(授業)に満足している。

v) 韓国語

韓国語教育の能力モデルは、最も近い海外である韓国に短期・長期に滞在するという、実現性の高い目標があり、その目標に合致した授業であれば、言語活動型であっても、説明中心的であっても、能力増進効果が高い、というものである。

満足モデルでは、言語能力の増進が最大の要因であることから、韓国語の履修者は、授業そのものより、履修成果によって、満足度を評価している。

4.3.5 おわりに

ここでは、評価に関して、「言語能力の変化」「満足度」「教授法」の3群についての単純集計(平

均値・相関係数による比較と検定)と、設問群別の主成分得点による要約統計量を用いた回帰分析の結果のみを取り上げた。能力モデル(あるいは満足モデル)による回帰分析結果から、例えば、言語能力(あるいは授業満足)に教育がどの程度貢献するか、数量的に寄与度が得られたので、具体的にどの教授法が、どの言語能力の変化に、どの程度貢献したのかを、分析する必要がある。これは、言語能力8設問と教授法5設問の言語別相関係数を見ることで、分析可能である。言語活動型授業と言語能力変化の相関を例示する(図-12)。

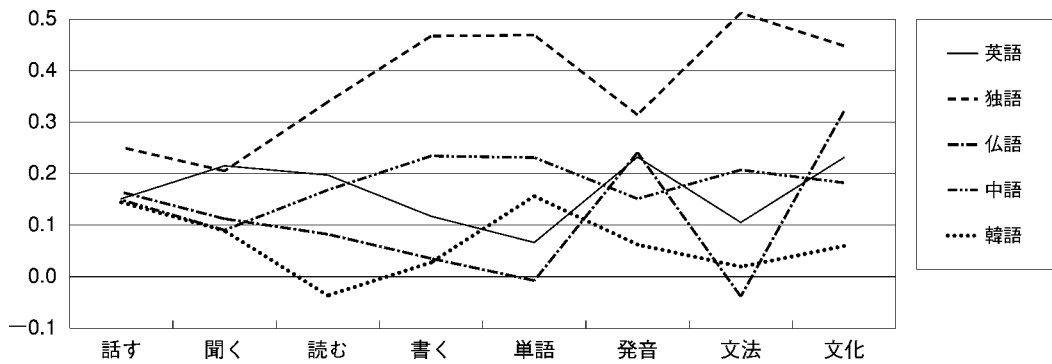


図-12 言語活動型授業と言語能力変化の相関

また、クラス間の教育のばらつきなども、クラス相関係数から、読取ることができる。これらが、今後の分析課題である。

[注]

- (1) ここでは、全回答者についてニーズ設問 19 変量の主成分分析を行い、本学の語学ニーズの特性を把握し、その言語別・学科別の主成分得点平均値を比較している。ニーズ設問 19 変量について言語別の主成分分析を行い、言語別の語学ニーズの特性を分析することもできる。
- (2) 群別主成分分析結果の詳細については、紙幅の都合で割愛する。
- (3) 学生の言語能力の変化や満足度には、上記 10 個以外にも影響を与える変数があるに違いない。そこで、各モデルについて特定の関数型を仮定せず、一般的な関数型のまま全微分により、回帰式を導くことにした。したがって、ここでの回帰分析は「ゼロ切片回帰」であり、説明変数・被説明変数は「変化分」でなければならない。ここでの主成分分析は「標準測度データ」について行っており、また主成分得点そのものも平均値=0まわりに標準化されているので、「変化分」と言ってもよい。分析で考慮していない変数があるので、回帰分析のあてはまりを示す決定係数(R²乗)は大きくはないだろうが、モデル全体の評価はF値で、個々の説明変数の説明力の妥当性はt値で、十分評価できる。
- (4) 各主成分の持つ意味については、4.2.(4)ii)と同様に、各固有ベクトルから読取った。

[引用文献]

大学英語教育学会実態調査委員会編 2002 『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究——大学の学部・学科編——』
田中慎也 1994 『どこへ行く?大学の外国語教育』 三修社

[参考文献]

竹内啓編集委員代表 1989 『統計学辞典』 東洋経済新報社

[付記]

本研究は、「2004 年度北星学園大学特別研究費による研究」の一部である。

12. 将来のあなたにとって、中国語・韓国語などのアジア言語は必要である。

1. 不要 2. やや不要 3. 中立 4. やや必要 5. 必要

○ 現在履修中の言語を選択したときの動機として

13. 教養を身につける。 1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

14. 将来役に立つ。 1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

15. 就職に有利。 1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

16. よい成績がとれる（履修が簡単）。
1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

17. 資格取得に役立つ。 1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

18. スキル（語学力）の習得。 1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

○ 現在履修している言語を選択するとき（入学前のはがきによる回答）に役立ったのは、

19. 大学配布の説明書。 1. 弱い 2. やや弱い 3. 中立 4. やや強い 5. 強い

20. 家族・知人・友人などの助言・情報。
1. 弱い 2. やや弱い 3. 中立 4. やや強い 5. 強い

21. 自分自身の考え・好み。 1. 弱い 2. やや弱い 3. 中立 4. やや強い 5. 強い

22. 選択希望を回答する時期は
1. 今のままで良い 2. 中立 3. 入学後のオリエンテーション時期が良い

実際に選択した言語を学んでみて：

○ 現在履修している言語の到達目標として、以下の項目の重要度は、

23. 海外旅行・短期留学。 1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

24. 長期留学・海外生活。 1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

25. 日常会話コミュニケーション。
1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

26. 電子メールでのコミュニケーション。
1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

27. インターネット等で情報を入手する。
1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

28. インターネット等で情報を発信する。
1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

29. 学術論文の読み書き。 1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

30. 音楽を原語で楽しむ。 1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

31. 映画を原語で楽しむ。 1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

32. 小説などを原語で読む。 1. 低い 2. やや低い 3. 中立 4. やや高い 5. 高い

○ 2年間の履修を終えようとしている現在、1年前と比べてその言語の

33. 話す能力は、 1. 減退 2. やや減退 3. 変わらない 4. やや増進 5. 増進

34. 聞く能力は、 1. 減退 2. やや減退 3. 変わらない 4. やや増進 5. 増進

35. 読む能力は, 1. 減退 2. やや減退 3. 変わらない 4. やや増進 5. 増進
36. 書く能力は, 1. 減退 2. やや減退 3. 変わらない 4. やや増進 5. 増進
37. 単語は, 1. 減退 2. やや減退 3. 変わらない 4. やや増進 5. 増進
38. 発音は, 1. 減退 2. やや減退 3. 変わらない 4. やや増進 5. 増進
39. 文法知識は, 1. 減退 2. やや減退 3. 変わらない 4. やや増進 5. 増進
40. 文化的な事柄に対する理解は, 1. 減退 2. やや減退 3. 変わらない 4. やや増進 5. 増進

○ 2年間履修した結果、この言語の学習は、

41. 面白かった。 1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う
42. やりがいがあった。 1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う
43. 8単位分(週2回2年間)の時間数は, 1. 少ない 2. やや少ない 3. ちょうど良い 4. やや多い 5. 多い
44. 到達目標の達成に役立った。 1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う
45. 積極的に受講した。 1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う
46. よく理解できた。 1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う
47. 色々と応用できた。 1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う

○ 使用テキスト・教材・プリントなどについて

48. 到達目標にあっていた。 1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う
49. やさしかった。 1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う
50. 応用力を育てた。 1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う
51. ペアやグループでの練習や、自分で調べたり発表したりすることが多かった。 1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う
52. 解説・説明中心だった。 1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う

○ 大学での語学教育の必要性について

53. 大学教育に、英語は必要である。 1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う
54. 大学教育に、独語・仏語などのヨーロッパ言語は必要である。 1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う
55. 大学教育に、中国語・韓国語などのアジア言語は必要である。

1. そう思わない 2. やや思わない 3. 中立 4. やや思う 5. 思う

以下の設問は、「はい＝1」「いいえ＝2」のどちらかにマークしてください。

○ 今後の外国語学習について卒業単位として認定されるとすれば、

56. 現在履修している言語の学習をもっと続けたい。 1. はい 2. いいえ

57. 外国語はこれで充分である。 1. はい 2. いいえ

58. 別の言語を学習したい。 1. はい 2. いいえ

59. 58で「1. はい」と答えた方は、どの言語ですか。一つだけ選択してください。

1. 英語 2. 独語 3. 仏語 4. 中国語 5. 韓国語

6. イタリア語 7. スペイン語 8. ロシア語 9. その他

58で「2. いいえ」と答えた方は、59. を空欄にしておいてください。

○ その他

60. 大学の授業・単位とは別に英語検定、TOEFL、独語検定、等の取得希望がある。

1. はい 2. いいえ

61. 高等学校で英語以外の外国語を履修した。

1. はい 2. いいえ

62. 61で「1. はい」と答えた方は、どの言語を履修しましたか。

1. 独語 2. 仏語 3. 中国語 4. 韓国語 5. その他

以上で質問は終わります。ご協力ありがとうございました。

[Abstract]

Students' Needs and Regard for Learning Foreign Languages

Shuko SATO

Akira NAKAYA

Keiko HAYASAKA

Yoshiro TAKASHIMA

Eriya TANASE

James ALLISON

Thomas GOETZ

Drastic changes have taken place in university foreign language education since the 1991 Curriculum Reform for Universities. Results have indicated that college students are interested in a greater variety of foreign languages and less interested in English learning. These changes have coincided with a worldwide trumpeting of the importance and usefulness of learning English. To improve the language course curriculum in the future, a survey was administered to determine students' needs and how they regarded their foreign language education. Approximately 800 sophomore students enrolled in required foreign language courses (English, German, French, Chinese and Korean) were the subjects. The Likert-scale questionnaire included sixty-two items concerning 1) students' needs, 2) motivation, 3) course evaluation and 4) students' regard for their foreign language education. Statistical analysis of the data revealed that a majority of the subjects recognized the importance of learning foreign languages, but their course evaluation and regard for their foreign language education varied depending on the language.